李退溪の人間像と学問

Toe-Gye Lee's Humanness and His Thoughts

金 裕 赫*

1. 李退溪の人間像

李退溪は，彼の生涯が物語っているように，積極的な自然理法実行型の人間像を彫塑しようと努力した．自然理法は，摂理を意味する．しかしその摂理とは奥妙なる面を現わすのみで，その実体の全貌を現わしてはいない．故に人間は，その摂理の実体をより赤裸々にさばくため，科学的な方法をはじめ，あらゆる分野にわたる学問的な手段を動員している．しかし，科学は科学なりの自体的な限界があるのである．科学的な限界を克服する方向を提示させる論理としての哲学の必要性は，即ちここから提起されるのである．

李退溪が，早くから「『心』が何であり，また『敬』とは何か」に関して深い研究を重ねてきたのは，人間と自然との最適調和基準を探しだすための努力であったと理解できる．即ち，「天人合一」の道とは何であるかに関する解答を追究しながら生活を営んできたのが退溪の生涯であり，同時に彼の学問研究であったのだと言うことができる．

自然を主宰するのが摂理であるとすれば，人間の肉身を主宰するのは心である．退溪の「心学圖」より考えてみれば，「心」は，一，虚霊であり，二，知覚であり，三，神明を基とし，一身を主宰しているのだと説明されている．この三つの要素はどんな形象もないのみならず，無窮なる造化の理致を意味するのであり，それは即ち，自然の理法が持つその意味と共に相通ずるのである．

かかる主宰要素がいかに作用するかによって，我等の一身が持つ行動挙止が現われてくるのであり，またその現われている形象に照らして，品行が端正であるかないかをはかることになる．

品行正しく，節度があり，また格律が確立されているとき，人間はより自然理法へ接近してゆくことができるのだと退溪は教えているが，その教えの根源にあたるものが，即ち「敬」である．されば，「敬」をいかに生活化するかに関して，退溪は「處敬」とか「居敬」とか，または「敬身」という言葉を常に使ってきた．特に，退溪の「小學圖」より見れば，「敬身」することによって，
第一，心術の要訣を明らかにする（明心術之要）
第二，威儀の法則を明らかにする（明威儀之則）
第三，衣服の法制を明らかにする（明衣服之制）
第四，食事の禮儀を明らかにする（明飲食之節）
ことができるのだと闡明（せんめい）している．それでは「敬」の真意は何であろうか．「敬」と同じ意味に使われる「恭」があるが，韓国においては，その二つの字を合わせて「恭敬」と使っている．即ち，「敬」の字を指して「恭敬の敬」と使いながら，その意味と音をともに発音する方式で読んでいる．しかし，「恭」の字と「敬」の字

*大韓民国、檀国大学教授、同中央図書館長

が持つ意味は同じではない.「恭」とは外貌に現われるのを意味するし（在貌為恭),「敬」は心の状態として存在するのを意味する（在心為敬).故に，敬う心をもてば，生活態度は自然的に恭遜になれるのである.

このような視点で考えてみると，退溪はなぜ「敬」に対して深い関心を傾注してきたのかをより易く理解することができる.「敬」が存在しないとすれば心が乱れるし，心が散漫になれば感性または情感が発動して行動挙止が節度を失うことになり，遂には，良心と本心がそれなりの本質への元返しが難しくなると考えたからである.

人間が「善」を追究し，またそれを固執しようと（択善固執）するばかりでなく，感性的な誘惑を振り払うため自己を克服する（克己復禮）よう努力し，または，単に一人でいる時に落ち入りやすい放蕩な衝動を自ら抑えながら（愼独)，全ての事に対して真実と誠実を傾け，真心を盡（尽）くす（盡心，執事敬）のはいうまでもなく，心の実体をより完全的に保存することを以て，心が持つ虚霊と知覚及び神明の無限性を発顕させるためである.

摂理によって現われる自然界の諸現象が，その秩序性を失うことになれば，摂理の作用は麻痺させられる．それは，煤煙による大気の汚染が異常気温を生み出すとか，廃水による江河の汚濁が水中生物の生態を奇型化させる公害の事例と違うところがない．同様に，人間が「居敬」することができないといえば，行動の紊乱を招くようになるのであるが，それはちょうど大気を汚染し，水質を汚濁させた公害要因と同一なのである.従って，良心は麻痺症勢にかかり，本心は昏迷になって，心が持つ虚霊性と知覚力及び神明性を喪失することになり，同時に人間は奇型化された魚貝類の如く精神的な廃人になってしまう.

退溪が，特に仁，義，禮，智，信に基づいて「五端」を重視してきたのは，次のような相当な理由がある.

一，仁は愛をそなえている理致であること
　　（具愛之理）
二，義は宜をそなえている理致であること
　　（具宜之理）
三，禮は敬をそなえている理致であること
　　（具敬之理）

李退溪像

四，智は是非曲直を分揀（かん）する別の理致をそなえていること（具別之理）
五，信は誠実の理致をそなえていること
　　（具実之理）

この五つの理致が，一，惻隠の心，二，是非の心，三，辭（辞）讓の心，四，羞悪の心，五，誠実の心と現われるとき，これを以て「五端」という．しかし問題は，その「五端」が持つ「理」が「気」によって昏迷になるというところにある.「気」は感情の形態で現われるが，その感情が限界を踰越することになれば「理」は昏迷になる.

感情は七つの種類で現われるのだとして，これを七情という．七情とは，喜，怒，哀，懼（かく)，愛，悪，欲をいうのである．もし喜がすぎると放蕩になり，怒がすぎると乱暴になり，懼がすぎると卑劣になり，愛がすぎると傲慢になり，悪（憎）がすぎると偏倚になり,欲がすぎると無禮になる.

人間は，理性的に自身を自制しようとするよりは，感情にひかれやすい．従って，最適調和の道をたどることは非常に難しいのである.

こういう視点より,「中庸の道」を探さなけれ

ばならない要求が提起されるのである.「中」とは,不偏,不党,無過,不及を意味するし,「庸」とは,不易を意味するのである.それ故に「中」は「正道」であり,「庸」は「定理」である.　不易(かわらない)の定理を以て正道を指向してゆけば,理気の調和美に基づいて彫塑される人間像を追究することができるのだという論理が,退溪の理論的な底流であるのだと考えられる.

特に退溪は,そういう思想的な体系を学問的に定立したばかりでなく,自らそれを実践躬行してゆくため,日常生活の格律をより確かにしていたところで,退溪が持つ人間的な偉大性を発見することができるのである.

2. 退溪の生涯の一片貌

退溪は西紀一五〇一年十一月二十五日,今の慶尚北道安東地方にあたる禮安県温溪里で生まれた.しかし退溪においては,出生して七カ月目に父親を喪う不幸な試錬が迫ってきた.振り返ってみれば,中国の大聖である孔子も,三歳の時,父親を喪って偏母膝下で生長したし,また亜聖といわれる孟子も,幼い時に父親を喪って母の教えに依り立派に育てられた.

退溪も韓国式の年数で二歳の時,父親を喪ったけれども,その母親の厳しい教訓は,常に退溪をして自省自粛しながら,自己完成のため精進させた.それは,退溪の年譜に記録されているところによれば,よく理解することができる.退溪の母親は常に訓戒して曰く,「世間の人達は,寡婦の息子は教えを受けられない故に,しつけ(manners)がないものと皮肉を言うかも知れないから,お前達は誰よりも百倍以上努力せねば,そういう世間の皮肉を免がれることができない(世常訾寡婦之子不教,汝輩非百倍其功,何以免此譏乎)」と教えながら,特に身持ちと言行に対して注意するよう訴えた(尤以持身謹行為重).おそらく,退溪がそれ程「敬」思想を深化させることになったのは,その母親の訓戒に強く影響された面があることを考えさせられる.

退溪は,幼い時から非常に聡明であったので,六歳頃から書を読みはじめ,十二歳頃には,既にその叔父より論語を教えられた.また十四歳の頃からは,中国の名詩人である陶淵明詩に深酔されていたし,二十一歳の時には,周易の講究のため寝食を忘れるほど熱心だった.二十七歳の時,「進士試験」において首席で合格したのをはじめ,二十八歳には「中進士試験」に,また三十二歳には「文科別挙初試」に,そして三十四歳には最後の国家試験に及第(合格)し,その時から官職に務め始めたのである.

しかし退溪は,四十八歳の時には,中央官庁に務めている官吏達のいわゆる腐敗した渦中より抜け出るため,自ら地方の外職に転勤する意思を奏請した.はじめは青松郡という地方に務めるよう希望したけれども,意外にも忠清道にある丹陽郡の郡守として発令旨拝受することになった.青松郡と丹陽郡は,現在においても地方的な財政自立度が低い郡であるばかりでなく,交通条件とか産業与件なども非常によくない地方である.それ故に,誰もそのような片田舎地域の守令として務めようとする者は殆どなかった.

しかし,退溪は早くから「人達が欲しがるものに対しては勇気を持って捨てるし,一方,人達が捨てるものを取得ることを知らねばならぬ(人取我棄,人棄我取)」という聖言を実践するほど修養を重ねていたわけで,そのような外職勤務を自ら奏請することができたのだと思われる.

殆どの人々は全く関心のないそんな地方であっても,青松郡と丹陽郡は山水が秀麗であり,景色が美しい所として指折り数えられる地域である.退溪は,昔から疎外されているその地域の住民達を,より温く治めなければならないと考えながら,「治民の道」を盡(尽)くす決心もしていたばかりでなく,より美しい自然と伴うため,詩人らしい景色好きな心も備えていたのである.それは退溪の絶句一首によく現われている.

青松白鶴雖無分
碧水丹陽信有縁

即ち,「青松郡地方の白鶴とはたとえ縁分はなかったとしても,山水景色がすぐれている丹陽地域とは,まことに因縁があるらしい」という内容である.

しかし,退溪は丹陽郡守に赴任してわずか十カ月後に,また今の慶尚北道豊基郡守として転任しなければならない立場になった.なぜかと言えば,退溪の兄である大憲公が忠清道(昔は道に南北の

区別がなかった)の監事（知事）に任命され赴任してきたからである．丹陽郡は忠清監事の治下にある地域であるけれども，豊基郡は慶尚監事の治下にある地域である．兄弟が同じ地域において務めれば，公務を公平的に執行することも期待できないし，また官吏として私情が通じることになれば，社会的な弊害も派生しやすいと心配し，退溪は豊基郡守に転任してゆくことを自ら要請したのである．

その後，退溪は五十歳になる年，初めて寒栖菴を建て，その堂名を「静習」と名づけ，一層学問に精進した．勿論その後にも数回にわたって朝廷の出仕令を受け，いろいろな重責を務めたこともあるが，退溪は常に学問に志を置き，一寸の時間も大切にする生活で一貫してきた．

その有名な著述の殆どが，五十歳後から書かれたのを見てもよく分かるし，また退溪が故郷に帰って温溪之西に卜居しはじめたその頃が，即ち唯一無二の契機になったことも知ることができる．　退溪は寒栖菴にて読書している時，次のような詩を残している．

身退安愚分
学退憂暮境
溪上始定居
臨流日有省

「此の身は官職より退いて，持ち運のとうり安らかに生きすぎることになったけれども，学問に遅れをとり老いゆく老年人生が心配である．かわ(退溪）の上にはじめて居處を定め，毎日，水の流れる川岸に行くと，省察されるところ多い．」退溪は，西紀一五七〇年十二月に逝去するまで，七十歳を一期としているが，その残した教訓は非常に多い．

臨終するその日の朝にも，平素愛玩してきた梅盆に水をやったばかりでなく，臨終直前には，周辺の人達をして助け起され，正座した後に恬然として逝去した．これがいわゆる君子らしい最後の姿として見せられたところである．

偉大なる学問を成し遂げている巨儒にも不幸なな試錬は重ねられていた．孔子の場合において，その息子である鯉が先に死亡したという不運なことがあったように，退溪の場合においても，四十八歳の時，その息子である寀と先に死別しなければならない不幸なことがあったのである．そうかといえば，退溪は，二十一歳の時結婚した許氏夫人と二年後にあたる二十三歳の時死別したし，さらに三十歳の時結婚した権氏夫人とも，四十六歳の時また死別せねばならぬ悲運を免がれることができなかったのである．

このような衝撃が重なる生涯であっても，退溪が常に超然的であったのは，おそらく「天人合一」の正道か何かを悟っている精到の高い学問的な深い境地を，自ら開いていたのだと感じられる．論語を見ても，顔回が四十九歳の時夭折されたのを心痛く感じた孔子は，「天は予を亡ぼした，天は予を亡ぼした（天亡予，天亡予)」と慨嘆したことはあるけれども，孔子の息子が死亡した時には，それ程心痛さを示したことはなかったのである．それは，天の意を知る者だけが天の志に順應（応）する（知天者，應乎天）という道を教えてくれる悟訓ではないかと思われるが，これが即ち，退溪の生涯が持つ一片貌だということができる．

3.　退溪学と日本の儒教

退溪学を誰よりも深く研究してきた阿部吉雄は，その著書「李退溪～その行動と思想～」の中で，次のように書いている．「李退溪の徹底して根本を培養するという修養学は，日本の山崎派，大塚派から特に尊ばれ，明治に及んで，元田永孚の思想を通じて，明治の教育方針の確立にまで間接的ながら関わりを持った」（日本評論社　1981, p.171参照）と明らかにしている．

日本儒学の発展過程を見れば，阿部吉雄の説明のとおり，第一には古代の律令国家時代であり，第二には江戸時代，そして第三には明治時代につながって発展してきたのである．日本において一大革新を成した時代が二回あるが，一回目は「大化の改革」であり，二回目は「明治維新」である．ところが一つ特記しておきたいのは，革新が成される時こそ必ず儒教が指導思想となってきたということである．

律令時代は儒教文化の吸乳期の時代であり，江戸時代は消化時代であり，明治時代は儒教文化を以て血と肉を作りだす栄養としたばかりでなく，その上に西欧文化を受け入れたいわゆる血肉化の時代である．

四世紀末頃，百済より日本へ渡っていった（いわゆる渡来人）王仁（わに）が，論語十冊と千字文一冊を伝えることにより，初めて文化が伝来した（高柳光寿編，日本史辞典参照）．王仁は，当時の應信（応神）天皇の太子である菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）の師となったばかりでなく，王仁の子孫は，文筆家として朝廷に務めたと伝えられている．時代をさかのぼっていけばいくほど，韓日間の文化的な関係は，なかなか分離できない共通的な立場であることが考えられる．

いろいろな古墳より発掘されている内容物によっても明らかになっているが，そのほか印刷活字文化とか，陶磁器文化などに至るまで，その授受過程は，全てが戦争とかまたは交易などを契機に成されていることは否定できない事実である．

「文字がないところには文化がない」という言葉もあるが，百済の王仁を嚆矢（こうし）として文字を知ることになり，その後退溪学が，壬辰乱（文禄慶長の役）の当時，捕虜としてつかまえられた姜沆（退溪の弟子）によって日本においての儒学が中興されたのである．

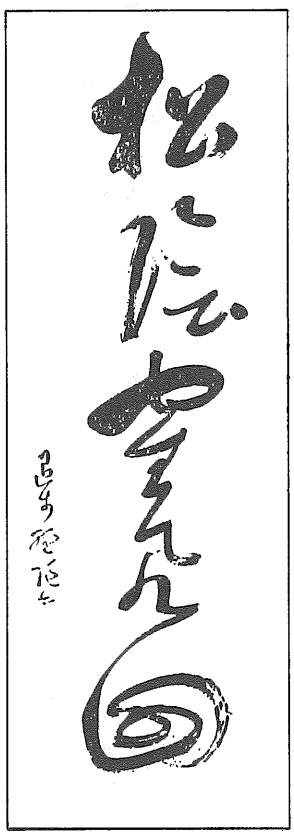
日本において近世の儒教の開祖として知られている藤原惺窩は，元来禅僧であったが，その時の朝鮮の文人達との交際を行いながら還俗し，儒服を着はじめた．藤原惺窩は，一五九〇年に朝鮮の通信使である黄允吉（正使）及び金誠一（副使：退溪の弟子）と共に，日本へ行った許筬（書状官）と交り合いながら，朝鮮儒学に対して深い感動を受けたばかりでなく，その後捕虜になってつかまえられてきた姜沆（1567－1618）より，朝鮮儒学に関して講論を受ける間に，誠に自信感を持って，自分なりの儒者として，独立的な学派を起こすことになったのだと記録は伝えている．

藤原惺窩が交わった許筬（1548－1612）は，書状官として日本へ行き通信使を随行したけれども，それはすでに性理学に通達していたのである．そうかといえば姜沆も経史百家に通達した性理学者であったことなどを勘案すれば，幸いにも藤原惺窩は，本当の正統性ある真儒達との交りを行ったのだということができる．

藤原はその前からも中国の朱子学に関して識見を持っていたけれども，許筬と姜沆との交際を契機として，より強い確信を持つことになったばかりでなく，特に姜沆により退溪学の真価を吟味することになって，日本儒学をより花咲かせる自信力を得たものだと思われる．

自分なりに朱子学に対して深酔していた林羅山（韓語原本を読む程の実力があったと伝えられている）が，藤原惺窩の門下生として入門しながら，退溪学はより繁昌されていった．そうかといえば，他の面においては山崎闇斉（1618－1682）が，退溪の「自省録」を読んで感動し，退溪学の真価を認識して，これを顕彰していったのである．

また他の一方においては，山崎学派とは別に，熊本地方において大塚退野（1677－1750）の学派が起こった．大塚退野学派においては，後に横井小楠とか元田永孚などの優れた学者を輩出させ，それらをして明治時代の教育方針を定めるとき，多くの影響を与えたと記録は伝えている．元田永孚（もとだえいふ）の字は「子中」であり，號（号）は「東野」である．明治四年に宮中に入り，約二十年間にわたって明治天皇の「御侍講」となっていたばかりでなく，明治の「教育勅語」を草案したこともある．特に元田は，「経筵進講録」とか「幼



大塚退野筆跡

学綱要」などを編述したが，その中「幼学綱要」は，明治初期において，小学校修身教科書として全国的に普及されたこともある．

このような流れによって，退溪学は，その後においても名高い佐藤直方，稲田迂斉，楠木碩水などの学者により深化拡散されてきたと，阿部吉雄は述べている．

考えてみれば，日本の儒学者達が特に退溪を尊敬するようになったのは，中国の朱子学をより批判的な視角に基づいて発展させてきたばかりでなく，程朱学において論議されてきた理気論をより明確に整えて，学問的に，または思想的にその体系を定立しておいた所にある．また従来の観念論的な吟味方法より免がれて，人間としての意味ある実存論的な価値体系を明らかにし，そうして人間観と社会観，世界観，宇宙観をはじめ，生活観，倫理観，学問観及び教育観などを確立してゆく道程を提示しておいたことなどが，退溪尊敬の根源ではないかと思われる．

4. 結び：現代的意義

昔の書物に，「時有古今，道無古今，理無東西」という言葉がある．即ち時代には古今の別があるけれども，道理には古今の区別がなく，また理法には，東西南北のように地域的な区別がないという意味である．

今から四百余年前にあたる時代の退溪学が，現在において国家とか民族などの区別を越えて，全ての人達による共感が得られるし，また研究の共同広場を作りだすため，国際的に交互関係が高められてゆくのは，おそらく退溪学の中には，時空性を超越する理法が含蓄されているという証拠である．

現在の如く理念的な紛争と対立による犠牲を強要されていた時代もなかったし，また現在のように高度に発達した科学文明のなかで，利便な物質生活を満喫していた時代もなかったのである．しかし，人間は自ら作り出した「イデオロギー」的な「メカニズム」のために苦心の渦中より抜け出す余地がないし，また自ら創り出した物質文明の「メカニズム」より脱出できない二重的な憫（あわれ）みに落ち入っている．「イデオロギー」が憫みの問題を引き起こした母体になったのであり，また物質文明が憫みを加重させる原因となっているということは，一言でいえば，人間の本性を侵触する逆作用があるからである．

人間の，より意味ある存在価値を追求してゆくために「イデオロギー」が必要なのであり，また人間の生活をより豊かにするために物質文明が必要だったにもかかわらず，今日，人間がかえってその必要な産物によって苦憫的な逆挑戦を受けている立場になっているといえば，それは明らかに克服してゆかねばならない現実的な課題なのである．

退溪学が，今日，洋の東西にかかわらず多くの国より広く研究されているその基本的な理由は，おそらく人類共通の憫みを解消してゆくための関門を探してみたいということからである．

特に韓日両国間においての文化的な発展過程を時系列的に逆のぼればのぼるほど，文化的な脈絡の一体性を発見することができる．言い換えれば，視界高度を高めてゆくほど，両国間の文化的なつながりが多いことを知るようになるばかりでなく，誠の意味においての協力可能性もより広めてゆくようになれることを思わなければならないだろう．退溪学が，既に韓日間の文化的な通路として架橋になっているのだと理解すれば，それはもはや韓中間または日中間の文化的な共域性を形成している意味で受け入れられることになる．

民族的な概念の国境と，政治的な意味の国境は，いつも狭く，また障害になっている．しかし学問的な思想は，そのような障碍要因を克服してゆく力を持っている．従って，政治的であり「イデオロギー」的である争点によって傷害されやすい人間性の本域を，取り戻して培ってゆく希望と可能性を広めなければならないだろう．

退溪学に関する研究は，即ちこのような視角に基づいて見れば見るほど，その時代的な意義がひとしお感じられると言い得る．かかる故に，退溪学はいかなる場合においてみても理気学であり，同時に人間本体学である故に，或る特定分野のものだけの研究対象ではない．社会科学徒の一員である筆者の場合においても，限りなく研究してゆかなければならない学問的な余地が多いのだと，筆者なりの判断に基づいて，恐れ多くもこの論文を書いたことを明らかにしながら，後続きの原稿を準備する次第である．